

# イチゴ ハダニ類について



図1 イチゴ葉縁部の発生状況  
(左上 ナミハダニ「顕微鏡下にて」)



図2 かすり状の被害痕  
(発生初期)

## 1 生態

イチゴを加害する主な種は、ナミハダニ（学名：*Tetranychus urticae* Koch）とカンザワハダニ（学名：*Tetranychus kanzawai* Kishida）である。両種の体長は約0.5mm程度と小さく、両種とも雌雄を肉眼で区別することは難しい。

ハダニ類の発育速度は、25℃前後では1世代が10日前後と速い。1雌当たりの産卵数は100～150卵である。株から株への移動速度は遅い。

本虫による被害は、主に葉の吸汁による被害で生育に影響するほか、多発すると枯死する。まれに果実への吸汁により、着色不良となる。

## 2 発生状況

寄生苗の持ち込みやほ場外からの飛び込みによって、ほ場に本虫が侵入する。葉へ寄生した直後は被害は目立たない。寄生直後から産卵・増殖が始まり、増殖した本虫は新葉が展開するとともに新葉に移動する。新葉では吸汁により、白いかすり状の斑点が見られるようになる。この頃までは、ほ場内ではスポット的な発生であるが、さらに増殖すると隣接した株に移動し、ほ場全体で確認されるようになり、食害によって茶褐色となった葉や未展開葉時に食害された矮化した葉が見られるようになる。激発時には、枯死株やハダニ類の吐く糸で覆われた葉が見られる。



図3 多発によるクモの巣症状

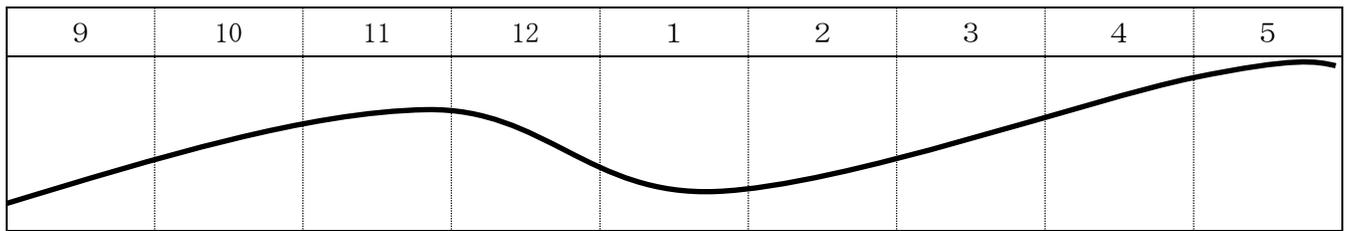


図4 ハダニ類の発生状況

### 3 防除対策

本虫の本ぼへの侵入は、寄生苗の持ち込みである。このため、育苗期には、異なる系統の薬剤によりローテーション防除で発生量を抑える。本ぼでは、発生を見逃すと急激に増殖し、薬剤防除が困難となるため、発生を常に観察し、防除のタイミングを逃さないように注意する。

なお、薬剤抵抗性の発達を招くため物理的防除と組み合わせて行う。

#### (1) 物理的防除

本虫はほ場内やほ場周辺の雑草で生息し、増殖を繰り返すため、雑草は除去して飛来を防ぐ。

古葉はハダニ類の増殖源となるため、古葉かきは確実にを行う。特に薬剤防除の前に実施すると葉裏に薬液がかかりやすくなり、防除効果が上がる。

#### (2) 薬剤防除

薬剤は、密度が低いうちに、成虫に効果が高いもの、卵に高い効果があるもの、気門封鎖といった剤の特徴を確認し、ミツバチや天敵への影響がないものを選択する。散布時は葉裏や下葉によくかかるよう丁寧に散布する。

薬剤は複数回散布が可能な剤もあるが、ハダニ類は薬剤抵抗性がつきやすいため、剤は年1回を目安にし、同一系統薬剤の連用は避ける。

#### (3) 天敵利用

天敵を導入する場合は、多発状態では天敵の捕食スピードよりもハダニ類の増殖スピードが速く効果が得られないため、ミツバチや天敵に影響のない薬剤で防除し、密度を抑えてから導入する。なお、天敵を導入しても密度が抑えられない場合は、薬剤防除に切り替える。